

8月9日 年間第19主日 マタイ14章22～33節 安心しなさい。わたしだ。恐れることはない。

今日の福音は先週の続きです。イエスは弟子たちを舟で先に行かせ、ご自分は一人で祈られます。先週もそうでしたが、イエスは祈りと休息を大切にされていたようです。そのあと、今日の福音では湖の上で起こった出来事が述べられています。

弟子たちだけを乗せた舟は強風のために進みあぐねていました。これは弟子たちの心を象徴していたといえるのではないのでしょうか。ガリラヤ湖を対岸のカファルナウムのほうに渡るときもそうでしたが、弟子たちの不安が向かい風に表されているようにも思います。今回はイエスがおらず、自分たちだけで次の目的地に行かなければならないという不安でした。そこへ湖を歩いてイエスがやってこられました。いつも言っていますが弟子たちが「幽霊だ」と恐れたというこの箇所が、お盆に近いときに読まれるのは偶然とはいえおもしろいですね。しかしイスラエルでは幽霊やお化けの存在をどのように考えていたのでしょうか。サドカイ派はあの世の命はないと考えていたようですし、あの世で裁きがあるとしてもこの世に迷い出ることにはないはずです。それとも、得体のしれない存在を幽霊やお化けと呼んでいたのかもしれませんね。

イエスが水の上を歩いてきたというのは奇跡の一つといえますが、病人のいやしや悪霊を追い出す奇跡とは異なるようです。いうなれば嵐を静めたような、自然現象を超える奇跡であるということもできます。これはイエスが天地の創造主と同一の方であることを表しているといえるかもしれません。このときイエスは「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない」と言われます。弟子たちは「幽霊じゃなくてイエスさまだったんだ」と安心したことは確かでしょうが、むしろイエスは弟子たちの不安、恐れを打ち消すために「わたしがともにいるから安心しなさい」ということを言われたのではないのでしょうか。その意味ではいやしの奇跡と通じるところがあるかもしれません。

ペトロが湖の上を歩こうとする出来事はマタイだけが伝えています。なぜペトロは自分も歩いてみたいと思ったのでしょうか。自分もイエスとともに歩みたいという思いの表れかもしれません。しかし、風が吹いて怖くなり、おぼれかけてしまいます。この出来事はペトロがイエスに「どこまでも従います」といいながら、イエスが捕らえられて裁判にかけられた際に三度弟子であることを否定したことを表しているかもしれません。そんなペトロをイエスは救い上げ、許してくださったのです。

わたしたちがいま、不安に思い、恐れていることはなんなのでしょうか。家族のこと、仕事のこと、お金や健康など生活にかかわることもあるでしょうし、ウクライナやイランにおける戦争、核兵器、隣国との関係など世界平和に対する不安もあります。しかし、不安や恐れはイエスの姿を見失わせます。「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない」というイエスの言葉に信頼し、希望を失わないことが大切です。 (柳本神父)